

# 卒業研究発表会抄録

学籍番号 01M2402 氏名 石井 玲

## 1. 研究テーマ

高齢大腿骨頸部骨折患者の退院後移動能力に影響を与える因子についての検討

## 2. 研究目的

高齢者の大腿骨頸部骨折は、多くが転倒を契機に受傷し、寝たきりの要因になるとされ、そうならなくとも歩行能力が低下する症例が多い。退院後の移動能力は、受傷前移動能力や痴呆の有無などに影響を受けると報告されている。しかし、移動能力の変化という観点からそこに影響する因子を検討した報告は少ない。本研究の目的は、退院後移動能力に影響を与える因子を明らかにすることである。

## 3. 研究対象と方法

平成 14 年 1 月から平成 15 年 12 月の間に大腿骨頸部骨折の手術のため、弘前記念病院に入院した 65 歳以上の患者 85 名（男性 18 名、女性 68 名）を対象とした。受傷時平均年齢は 80.2 歳、平均入院期間は 41.1 日であった。平均経過観察期間は 18 ヶ月であった。

カルテおよび看護記録より、患者の基礎的情報、痴呆の有無、理学療法（以下 PT）施行の有無、PT 実施期間、退院先、退院時移動能力を調査した。質問紙を郵送することにより、受傷前移動能力・調査時移動能力・退院後リハビリテーション（以下リハ）の有無と内容、本人および家族の退院後生活での不安感の有無と内容、住宅改修の有無と内容を調査した。施設入所者には施設入所時の移動能力、施設職員からみた転倒の危険性も調査した。移動能力は独歩（T 字杖使用も含む）3 点、歩行補助具使用 2 点、車椅子 1 点、寝たきり 0 点に分類した。統計学的分析には ANOVA と t 検定を行い、有意水準を 5%未満とした。

## 4. 結果

調査時自宅生活していたものを自宅群、施設入所していたものを施設群とした。自宅群 51 例、施設群 34 例で、受傷時平均年齢は自宅群 71.1 歳、施設群 83.0 歳で施設群の方が有意に高齢であった。入院期間は自宅群 50.5 日、施設群 25.2 日、PT 実施期間は自宅群 42.7 日、施設群 11.4 日で施設群の方が有意に短かった ( $p < 0.001$ )。

自宅群において、痴呆あり群が痴呆なし群よりも退院時移動能力が受傷前移動能力より有意に低下していた ( $p < 0.001$ ) 調査時移動能力が受傷前移動能力よりも有意に低下していた ( $p < 0.05$ )。退院時から調査時の移動能力の変化は痴呆の有無と関連がなかった。施設群では、各時点における移動能力の変化と痴呆の有無とは有意差はなかった。

自宅群における退院後リハを受けたものは 17 例 (40.4%)、受けなかったものは 25 例 (59.5%) であり、退院後リハの有無と各時点における移動能力の変化とは関連がなかった。施設群において、退院後リハの有無と退院直後から調査時の移動能力の変化には有意差はなかった。しかし、退院後リハを施行した 22 例中 12 例において、退院直後から調査時にかけて移動能力の改善が認められた。

## 5. 考察とまとめ

自宅群においては、受傷から退院までの移動能力の変化に痴呆の有無が影響を与えることがわかった。リハ施行の際には痴呆症状を考慮に入れたゴール設定が必要と考えられた。施設群では、施設内でのリハの有無と移動能力の変化には有意差は認められなかったが、退院後リハを施行した方が移動能力は向上していたことから、施設内でのリハのあり方を今以上に検討していく必要性が示唆された。

今回退院後生活での不安感、住宅改修、転倒不安はそれぞれ移動能力と関連がなかったが、それらの有無や内容を考慮すると、家族や本人が ADL における心配・負担・困難感を持っていると考えられ、自宅生活者へリハや社会サービスを効果的に導入するといった継続支援の必要性があると考えられた。